

見せず、八月十七日我々は南昌地区日本軍の第一線、西山万寿宮に到着した。

我々が日本軍の兵舎の脇を通過していくと、兵隊が典範令やその他の書類を焼いている。なにごとだと聞くと戦争は終わったのだという。この日宿舎についてからあらためて終戦の本命が発せられたと伝えられた。我々なんとも複雑な気持ちだった。

振り返って見れば、我々は大陸縦断二千キロに及び、多くの戦友と軍馬を失い、しかも今ここに終戦の本命、なんのためのいくさ、国家の隆昌を念じ、上官の命に服し、青春のすべてを軍務にもやしつづけた。我々の心に残されたものはなにか、戦争の悲惨さではないか。再び繰り返してはならない平和のとうとさを今こそかみしめている。

湖北殲滅作戦

愛知県 吉田新一

昭和十七年十月二十八日、召集を受け、幸三七二一部隊留守隊に入隊、五十日の教育を受けたのち、十一月末宇品港を出帆、玄海灘で船酔い、釜山港に上陸する。

十二月北支まわりで貨車輸送、浦口につく。南京に渡り二日、漢口に上陸し広水まで汽車でゆき、そのご徒歩で応山の幸三七二一部隊・連隊本部に到着する。

杉崎中尉が受領、その場で宮庭から裏山のポールを一回りして早い者より一列に並ぶ。自分は三番に到着、五番までその場に残り、あとは各中隊から受領に来ている下士官の命令にしたがえということでした。

各中隊に引率されたのち、杉崎中尉いわく、「ここに残った兵隊は連隊本部に残れるから幸せだと思え」といわれたが、連隊長以下曹長まで十六人、初年兵のため敬礼ばかりである。

十八年二月江北殲滅作戦に参加、毎日寒さと行軍中に小休止があり、駄馬に水を与えるなど初めての作戦参加で非常に苦労した。農家で育ったから体は丈夫であったが十分な睡眠が取れないため、眠たいばかりで、先が思いやられたが、二か月の作戦も眠いうちに応山に到着、当分の間警備につく。

四月、江南作戦に参加する。出発と同時に雨期になり毎日のように雨。宿舎につくと軍服の洗濯だ。よくしぼり家のなかで火をたき乾燥させる。翌日出発し、雨のなか渡河点で初の水馬、向こう岸で火をたいているまわりで体の暖をとる。軍服をきるにも雨でずぶぬれ、軍靴は糸が切れ口をあけてもかえる靴もなく、しかたなく縄で結び行軍、宿舎に着くとまたかわかすという繰り返しである。

江南作戦は二・五か月と随分苦労した。応山本部に到着と同時に、服部中尉の当番兵として命令を受ける。十九年六月、服部中尉の鎮江補充馬廠に馬の教育のため出張に随行した。二か月の教育を終え本隊に帰着すると、常德作戦に参加するため本隊は十日前に出発していた。

追及するよう命令が出ていたので、翌日軍装検査を受け、服部中尉と共に出発する。本隊は一日十里で行軍、宿営。追及者は一日十二ないし十三里で行軍しなければ本隊に追及出来ず、特別苦労したが、本隊と合流と同時に当番兵の交代命令があり、分隊に帰り分隊と行動を共にした。

作戦中、山越えの時には五日間食糧がなく、木の根までかじるほどで、飢え死にするかと思った。常德にはいる手前の山の中腹にわらがこいがあるのを見つけ、なにかとわらをとったところ甘藷の芽出しがあり十センチくらい芽がのびていた。芽をとりわらでぬぐい食べたが本隊においしかった。

その時、渡河点に駄馬の荷物を集積中、川上より飛行機が二機低空で飛来、友軍機だと思ったとたん爆撃、往復三回の爆撃を受けた。集積所に着いてみると雑のうや飯盒は穴だらけで監視兵七人が戦死していた。川幅は四十センチぐらいであったが、流れが急で水馬すると百メートルぐらい流され、やっと全員で向こう岸にあり、夜間になって家のなかで戦友を火葬したが、悲しさ

を通り越し無念だった。

戦闘中、師団司令部が敵に包囲され、わが部隊の宮川中尉と当番兵・後藤上等兵が命令受領に出発、三十分ほどしたとき、宮川中尉の乗馬が後藤当番兵が乗って帰ってきたので状況を聞くと、敵弾にあたり負傷とのことであった。このため当番兵として経験のある自分が代わって宮川中尉と命令受領に出発する。

途中、中尉に「召集兵であるから妻子はあるか」と尋ねられ、十七年二月結婚、十月に召集であると話した。宮川中尉は後藤の二の舞になることを心配されたのだと思いましたが、お蔭で途中一個小隊ぐらいの敗残兵があちこちにいたが、一発も銃声はなかった。

途中、命令書を宮川中尉は拳銃に、自分は四四式騎兵銃に装填し、往復六里、無事本隊に帰り連隊長に報告した。

夕方、戦闘命令により各分隊から半数ぐらいづつ師団司令部に向け出発、十時ごろにようやく敵兵は三々五々散った。敵兵のなかにも大和魂に負けぬぐらいの兵隊も二、三人いて最後まで抵抗したが、結局はわが兵に射殺

された。

応山に帰り警備、宮川中尉の当番兵を他の兵に引きつぎ分隊に帰る。

二十年四月、湘桂作戦に参加、零陵、桂林、柳州と作戦、五月十日折城地区警備、南寧で連隊の宣撫班要員として本部から派遣の長以下七人にて宣撫班が編成され、自分は良民の住民票係として約一か月宣撫した。その間、部隊の糧秣の買入などもおこなった。

二十年七月三日湘桂反転作戦、七月四日湖南省衡山県店門前において部隊の休宿車廠への進入時、前車の車輪が埋設地雷にふれ爆破し、受傷、衡山第一二八兵站病院に入院する。

八月十五日入院中、両足受傷で歩けないため戦友から、終戦の詔勅を聞き残念でならなかった。その後、後方へ移動、九江で右足下腿部の破片を摘出、当分療養し、最後は上海の陸軍病院に入院、昭和二十一年六月七日、内地送還のため上海を出帆した。

佐世保港に着いたが、伝染病発生ということで船に当分監禁され、二十二日に上陸、召集解除となる。名古屋

までの列車のなかでは敗残兵扱いでした。

八路軍との戦い

愛知県 杉江彦保

戦雲急を上げる昭和十九年、十九歳で繰り上げ徴兵検査を受け合格、十一月名古屋第二部隊に入隊する。連日の注射で発熱休養の連続で、十一月二十五日夜は大陸に向け出発、現地入隊する。

朝、下関港を出港、波高い玄海灘を航行中、約二時間対潜監視を命ぜられへとへとでした。十二時間かかり釜山港に入港した。

朝鮮、済州を通過、徐州で旅団長の訓示で、中支派遣専部隊なるを知る。海州から淮陰の大隊本部のある所まで地下足袋で、一日十里約五日間行軍す。地下足袋のため、足の豆の出来ない者はひとりもなく皆なんぎする。淮陰付近は八路軍の拠点で治安悪し。

一期の検閲もなく重機関銃中隊にはいり連日の討伐

と、合間には対米訓練の毎日でした。飯のうえの蠅を追うようなもので、東西南北と連日でした。

二十年八月七日、第五中隊の分遣隊一個小隊が八路軍にやられ、応援にトラック五台で行くが、途中地雷のため半日ほどおかれて到着したところ、小隊長以下全員軍服をはがされ、全裸にてクリークのなかに浮いていました。非常に気の毒でした。

終戦の三日前に出張命令により、翌日徐州に向け出発、途中運河のなかの船がまったく動かず一日ついやしました。石はとんでくるし、不思議でしたが、帰隊してはじめて終戦を知り残念でした。

帰隊後すぐ身辺を整理して、旅団本部の連絡を待っていたが、状況は悪化の一途でした。何分にも八路軍の本拠地で旅団本部も旅団作戦をし、我が大隊の救出をはかっていました。状況は悪くなるばかりでした。我が大隊は意を決し、強行突破をはかり、二人ほどの犠牲で無事目的地東隴海線の海州兵舎に落ちつきました。

我々は武装解除もなく、連日半日ほどの道路作業、使役と鉄道警備が仕事でした。奥地からの引き揚げが始